

(病床利用率)

試行開始後5年間の試行対象病院における病床利用率は表9（基本集計I、p1参照）のとおりである。

国立神戸病院と国立病院岡山医療センターは、本試行期間内に病院の移転が行われ、移転後は病床利用率が高くなっている。また、試行期間中に、国立豊橋病院は、病院存続について検討が行われ平成15年6月に、平成17年3月に廃止、国立豊橋東病院への統合が公表された背景もあり、病床利用率が著しく低下している。他の試行病院については、試行期間中に病床利用率の著しい変化は見られていない。

表9 平成10年度と平成14年度の病床利用率の状況（%）

	平成10年度	平成14年度	変化
仙台病院	89.7%	89.2%	-0.5ポイント
埼玉病院	87.4%	90.9%	3.5ポイント
千葉病院	92.5%	90.6%	-1.9ポイント
豊橋病院	67.5%	41.4%	-26.1ポイント
神戸病院	91.1%	96.3%	5.2ポイント
南和歌山病院	87.5%	88.5%	1.0ポイント
岡山医療センター	80.2%	90.7%	10.5ポイント
九州医療センター	94.2%	91.8%	-2.4ポイント
岐阜社会保険病院	86.8%	84.3%	-2.5ポイント
諫早総合病院	92.6%	84.4%	-8.2ポイント

(新入院患者数)

試行対象病院における新入院患者数の推移は表10（基本集計I、p4参照）のとおりである。国立神戸病院、国立豊橋病院は減少しているが、他の8病院は増加している。

表10 新入院患者の推移状況（件数）

	平成10年度	平成14年度	変化率
国立仙台病院	8268	9711	17.5%
国立埼玉病院	4644	6241	34.4%
国立千葉病院	6413	7222	12.6%
国立豊橋病院	2765	1995	11.8%
国立神戸病院	4909	4498	-27.8%
国立南和歌山病院	4424	4914	-8.4%
国立病院岡山医療センター	7597	9709	11.1%
国立病院九州医療センター	9405	11086	27.8%
岐阜社会保険病院	4847	5421	17.9%
健康保険諫早総合病院	5766	6657	15.5%

※変化率：平成10年度から14年度の差の平成10年度に対する率

(外来患者数)

試行対象病院における外来患者数の推移は表11（基本集計I、p4参照）のとおりである。試行対象病院に共通した外来患者数の推移の変化は見られない。

表10 一日平均外来患者数の推移状況（人数）

	平成10年度	平成14年度	変化率
国立仙台病院	1186.2	1057.8	-10.8%
国立埼玉病院	841.3	774.9	-7.9%
国立千葉病院	849.2	822.8	-3.1%
国立豊橋病院	547.4	402.6	-26.5%
国立神戸病院	727.5	729.7	0.3%
国立南和歌山病院	587.3	681.0	16.0%
国立病院岡山医療センター	767.9	817.5	6.5%
国立病院九州医療センター	890.6	932.3	4.7%
岐阜社会保険病院	1089.0	998.0	-8.4%
健康保険諫早総合病院	713.2	641.2	-10.1%

※変化率：平成10年度から14年度の差の平成10年度に対する率

(救急車受入件数)

試行対象病院における年間の救急車受入件数の推移は表12（基本集計I、p4参照）のとおりである。岡山医療センターで一時減少しているが、試行対象病院全体として、受入件数が増加している。

表11 年間救急車受入件数の推移の状況

	平成10年度	平成14年度	変化率
国立仙台病院	2313	3799	64.2%
国立埼玉病院	—	1625	—
国立千葉病院	1561	2923	87.3%
国立豊橋病院	297	458	54.2%
国立神戸病院	520	566	8.8%
国立南和歌山病院	552	675	22.3%
国立病院岡山医療センター	1374	1856	35.1%
国立病院九州医療センター	868	1493	72.0%
岐阜社会保険病院	749	1172	56.5%
健康保険諫早総合病院	251	564	124.7%

※変化率：平成10年度から14年度の差の平成10年度に対する率

一般に平均在院日数が短縮すると病床利用率は低下することとなるが、試行対象病院等において病床利用率の低下がおこらなかった理由としては、各病院において、積極的に入院患者数を受け入れる（新入院患者数の増加）、積極的に救急車を受け入れる（救急車受入数の増加）などの取り組みが行われたことがデータから評価できる。

なお、新入院患者数が増加していることから、少なくとも本試行の実施に伴って、支払い方式の変更などにより、患者ばなれがおこらなかったことが推測されるとの意見があった。

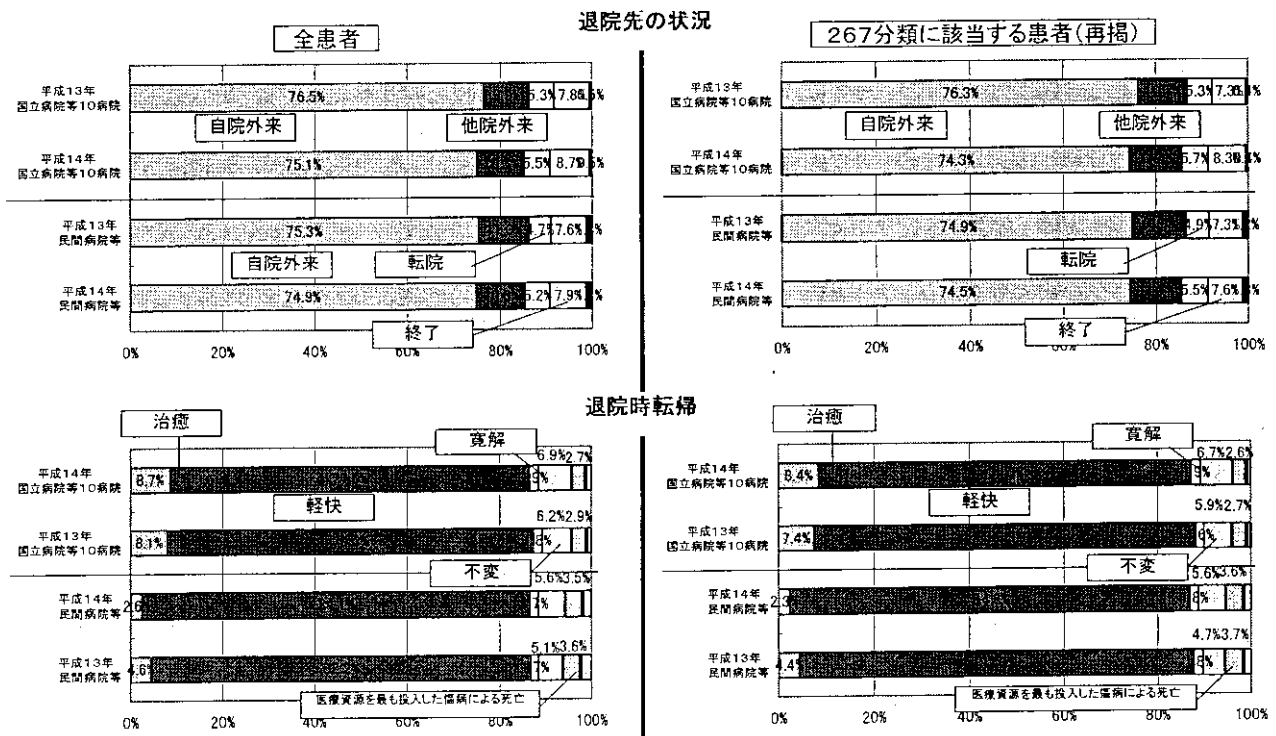
## 2) 診療内容の変化について

### ① 病院別にみた診療内容の変化について

(退院先、退院時転帰)

試行対象病院における退院先、退院時転帰の状況は図3（基本集計I、p7参照）のとおりである。

図3 年度別および病院別の退院先、退院時転帰の比較



平成13年度と平成14年度の267分類に該当する患者について、試行対象病院における退院先の変化をみると、「自院外来」が76.3%から74.3%へ2.0ポイント減少し、「他院外来」が10.7%から11.4%へ0.7ポイント増加している。また、「転院」は5.3%から5.7%へ0.4ポイント増加し、終了が7.3%から8.3%へ1.0ポイント増加している。

試行対象以外の病院においても同様の変化(図4)がみられており、定額払い方式による影響としての退院先の特段の変化はないものと思われる。

また、退院時転帰みると、試行対象病院では、「治癒」が8.4%から7.4%に1.0ポイント減少し、「軽快」が79.0%から80.9%へ1.9ポイント増加している。一方、試行対象外病院では、「治癒」が2.3%から4.4%へ1.1ポイント増加し、「軽快」が84.6%から83.3%へ1.3ポイント減少している。

「医療資源を最も投入した傷病による死亡」は、試行対象病院では、2.6%から2.7%へ0.1ポイント、試行対象外病院では3.6%から3.7%へ0.1ポイントそれぞれ増加している。

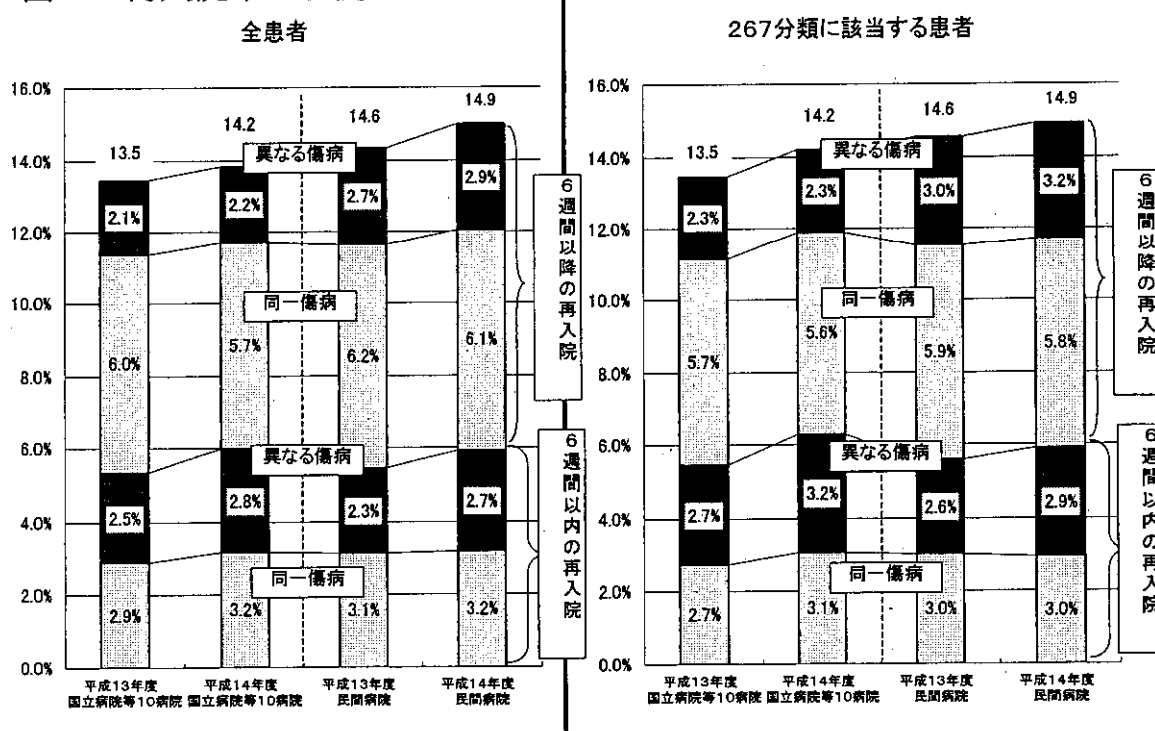
「治癒」と「軽快」の変化が、試行対象病院と試行対象外病院とで逆転している点は、試行対象病院において267分類に該当する患者の平均の在院日数の短縮の程度がより大きいことがデータで示されていることとの関連は考えられるが、断定は難しい。

(再入院患者数)

試行対象病院における再入院率の状況は図4（基本集計I、p8参照）のとおりである。

平成13年度と平成14年度の267分類に該当する患者について再入院率をみると、試行対象病院では、13.5%から14.2%へ0.7ポイント、試行対象外病院では14.6%から14.9%へ0.3ポイントそれぞれ増加している。

図4 再入院率の状況



- 同月内再入院データは分析対象外としているため、6週間以内の再入院率は実際の再入院率より見かけ上、低くなっている。
- データ識別IDが重複している場合に再入院ありと判断。「医療資源をもっとも投入した傷病名」のICDが同一の場合に同一傷病と判断。

試行対象病院における再入院率の増加については、同一傷病の6週間以内の再入院が、2.7%から3.1%へ0.4ポイント増加しているが、提供される診療の内容の変化（たとえば、悪性腫瘍等に対する化学療法のための短期の繰り返し入院の増加等）かどうか精査する必要がある。

岐阜社会保険病院からは、血液疾患の専門家による白血病の化学療法を始めたため再入院率が増加してきているとの報告があった（岐阜社会保険病院）。

さらに詳細な分析には「計画的な再入院」と「予期せぬ再入院」とを区分して把握することが、診療内容の変化の評価としては重要であり、今後、再入院率に関する調査を行う際には、これらを把握できるような調査設計が必要である。

## ②診断群分類別にみた診療内容の変化について

包括評価の対象となっている267分類の中から、出現頻度の高い診断群分類を24分類選定し、平成13・14年度データについて、在院日数、投薬注射点数、検査点数、処置点数、退院先、転帰を集計した結果は基本集計ⅡP1～42のとおりである。

なお、診断群分類別の診療内容の変化の分析において、試行対象病院では、包括評価の対象となった診断群分類の一部は出来高評価となっている点は注意する必要がある。

### (在院日数)

平成13年度及び14年度の在院日数の平均をみると、試行対象病院においては、24診断群分類のうち20診断群分類において短縮している。一方、試行対象外病院においても18診断群分類において短縮している。

### (投薬注射点数、検査点数、処置点数)

平成13年度及び14年度の投薬注射点数、検査点数、処置点数をみると、試行対象病院における投薬注射点数は24診断群分類のうち19診断群分類、検査点数は19診断群分類、処置点数は16診断群分類において減少している。

一方、試行対象病院以外の病院では、投薬注射点数は18診断群分類、検査点数は19診断群分類、処置点数は17診断群分類、減少している。

なお、これらの投薬注射点数、検査点数、処置点数の減少には、平成14年4月に行われた診療報酬改定が影響を及ぼしている可能性があることから、試行対象外の病院の点数の減少が、必ずしも薬剤の使用や検査の実施回数の適正化等によるものではないことに留意する必要がある。

また、試行対象病院からは、以下のような報告があった。

- 予定入院の場合には、外来で実施可能な検査は外来で行うようになってきており、外来検査の点数は増加傾向にある。一方で、診断治療が目的の、内科的な疾患については、入院における検査の実施状況に変化があまり見られなかった。

試行対象病院と試行対象外の病院とにおいて、概して、ともに投薬注射、検査点数、処置点数の減少がみられているが、この医療資源の投入量の減少が、診療内容の質の低下につながっていないかどうかの検証が重要であり、個別の診断群分類の診療内容の変化を見る必要がある。

## (退院時転帰、退院先)

平成13年度及び14年度の24診断群分類の退院時転帰・退院先をみると、試行対象病院における変化として注目できるものは、退院先では8診断群分類、退院時転帰では8診断群分類であった。また、試行対象外病院においては、退院先では10診断群分類、退院時転帰では5分類であった。

試行対象病院の退院先の変化として、比較的大きく動いているものは、①他院外来の増加(診断群分類番号1018以下、同様)、②転院の増加(1028、1036)、③終了の増加(4021、6109、6117、6159、15010)であった。また、退院時転帰としては、①不変の増加(1028、1029、9002、10002、10003、10004、12015)、②死亡の増加(1036)であった。

試行対象外病院の退院先の変化として、比較的大きく動いているものは、①転院の増加(1018、1028、1029、1036)、②自院外来の増加(5002、6108)、③他院外来の増加(6057)、④転院の減少(6109)、⑤終了の減少(6117)、⑥終了の増加(9002)であった。また、退院時転帰としては、①死亡の増加(1036、6057、9002)、②不変の増加(9002、12015、15010)であった。

これらは、退院先や退院時転帰について、個別に見たときに相対的に2年間の動きが比較的目的立ったものの数であるが、その評価は、個別の診断群分類毎に他の診療内容の変化と併せて総合的に見る必要がある。

なお、退院時の転帰については、治癒の率が高いと考えられる外科系疾患についても治癒と判断された率がかならずしも高くないことなどから、医師による判断基準が必ずしも統一されたものとはなっていないと考えられる。従って、上記の比較的目的のあったものを記載する際についても、治癒と軽快の構成割合の変化だけのものは、着目をしていない。今後、退院時転帰について調査を行う際には、その判断基準についてより明確化する必要がある。

## (個別の診断群分類の変化の状況)

以下の記述は、24診断群分類の中でも、平成13年度の時点で、各診断群分類の在院日数の平均が、試行対象病院と試行対象外の病院とで近似していたものについて比較を行ったものである。

### ○診断群分類1018：くも膜下出血（手術4あり） 基本集計Ⅱ、p2参照

試行対象病院では、在院日数の平均が49.1日から48.7日に0.4日減少し、投薬注射点数の平均が52,321.5から45,766.7点へ6554.8点減少、検査点数の平均は、7,173.1から7,139.3点へ33.8点減少、4,695.5から3,448.4点へ1247.1点減少している。

一方、試行対象外病院では、在院日数の平均が52.2日から56.7日に4.5日増加するなど、それぞれの指標において増加している。

また、退院先をみると、試行対象病院では自院の外来が、61.8%から67.7%へ5.9ポイント増加し、転院は25.0%から16.9%へ8.1ポイント減少している。また、退院時転帰は治癒が2.6%から4.6%へ2.0ポイント増加し、軽快も82.9%から84.6%へ1.7ポイント増加している。

このような入院医療の効率化の変化は試行対象外病院には見られず、定額払い方式の導入との関係が注目される。

### ○診断群分類1028：脳梗塞（手術7なし） 基本集計Ⅱ、p4参照

試行対象病院では、在院日数の平均が26.5日から22.8日に3.7日減少し、投薬注射点数の平均が16,518.8から15,115.2点へ1403.6点減少、検査点数の平均は、5,373.5から4,195.6点へ1177.9点減少、処置点数の平均は1,282.2から791.7点へ490.5点減少している。

一方、試行対象外病院では、在院日数の平均が26.4日から23.6日に2.8日減少し、検査点数の平均と処置点数の平均も減少しているが、試行対象病院の減少幅よりも少なくなっている。また、投薬注射点数の平均は増加している。

また、退院先をみると、試行対象病院では自院の外来が、52.0%から51.5%へ0.5ポイント減少し、転院は18.2%から20.4%へ2.2ポイント増加している。また、退院時転帰も治癒が2.3%から3.1%へ0.8ポイント増加し、軽快は77.7%から76.3%へ1.4ポイント減少している。

一方、試行対象外病院では、退院先の変化は、試行対象病院と同様の傾向であるが、退院時転帰では、治癒が1.2%から0.6%へ0.6ポイント減少し、軽快が84.0%から86.2%へ2.2ポイント増加している。

このような入院医療の効率化の変化は試行対象病院と試行対象外病院とと



もに見られているが、試行対象病院により高く効率化の変化が見られており定額払い方式の導入との関係が注目される。

○診断群分類1036：頭部外傷（手術8あり） 基礎集計Ⅱ、p7

試行対象病院では、在院日数の平均が24.4日から20.7日に3.7日減少し、投薬注射点数の平均が12,265.5から8,871.1点へ3,394.4点減少、検査点数の平均は、2,751.4から2,834.3点へ82.9点増加、処置点数の平均は2,394.8から1,782.3点へ695.4点減少している。

一方、試行対象外病院では、在院日数の平均が23.0日から21.0日に2.0日減少し、投薬注射の点数の平均点と検査点数の平均は、試行対象病院よりも大きく減少し、処置点数の平均は若干減少している。

また、退院先をみると、試行対象病院では自院の外来が、67.1%から46.6%へ20.5ポイント減少し、転院は17.7%から37.0%へ19.3ポイント増加している。また、退院時転帰は治癒が8.9%から4.1%へ4.7ポイント減少し、軽快は87.3%から84.9%へ3.4ポイント減少している。

一方、試行対象外病院では、退院先の変化は、試行対象病院と同様の傾向であるものの変化の程度は小さく、退院時転帰では、治癒が6.1%から2.0%へ4.1ポイント減少し、軽快が85.3%から85.4%へ0.1ポイント増加している。

この診断群分類1036においては、在院日数の短縮をはじめ医療資源の投入量の減少が試行対象病院にも試行対象外病院にも見られているが、いずれも転院が増加し、治癒の減少や死亡の割合が増加しており、その原因について調査が必要である。

○診断群分類2002：白内障（白内障手術あり 片眼）基本集計Ⅱ、p9

試行対象病院では、在院日数の平均が6.1日から5.8日に0.3日減少し、投薬注射点数の平均が981.1から930.6点へ50.5点減少、検査点数の平均は、958.2から918.1点へ40.1点減少、処置点数の平均が125.8点から115.6点へ10.2点減少している。

一方、試行対象外病院では、在院日数の平均が6.6日から6.5日に0.1日減少し、投薬注射点数の平均、検査点数の平均と処置点数の平均も、試行対象病院と同程度に減少しているが、試行対象病院よりも高点数で推移している。

また、退院先をみると、試行対象病院では自院の外来が、94.6%から92.9%へ1.7ポイント減少し、他院の外来は5.3%から6.5%へ1.2ポイント増加している。また、退院時転帰は治癒が6.1%から21.9%へ15.8ポイント増加し、軽快は92.5%から75.1%へ17.4ポイント減少している。

一方、試行対象外病院では、退院先の変化は、ほとんどが自院の外来であることは変わらず、退院時転帰では、治癒が12.4%から0.9%へ11.5ポイント減少し、軽快が87.5%から98.9%へ11.4ポイント増加している。

この診断群分類2002については、医療資源の投入量の減少が試行対象病院と試行対象外病院とともに見られ、また、診療内容の変化は概して変わっていないと思われるが、試行対象病院では、より少ない医療資源の投入量となっている。

○診断群分類12015：卵巣など悪性新生物（手術なし 化学量または放射線療法あり） 基礎集計Ⅱ、p38 参照

試行対象病院では、在院日数の平均が23.6日から21.9日に1.7日減少し、投薬注射点数の平均が32,788.7から29,310.5点へ3478.2点減少、検査点数の平均は、3,244.1から2,912.5点へ331.6点減少、処置点数の平均は138.7から394.8点へ256.1点増加している。

一方、試行対象外病院では、在院日数の平均が23.0日から11.5日に11.5日と大幅に減少し、投薬注射点数の平均、検査点数の平均と処置点数の平均も試行対象病院と比較し大幅に減少している。

また、退院先をみると、試行対象病院では自院の外来が、96.4%から95.7%へ0.7ポイント減少している。また、退院時転帰は治癒が2.4%から0.0%へ2.4ポイント増加し、不変6.6%から14.7%へ8.1ポイント増加している。

一方、試行対象外病院では、退院先の変化は、試行対象病院と同様の傾向であるが、退院時転帰では、治癒が0.0%で変化なく、軽快が65.1%から48.5%へ16.6ポイント減少し、さらに不変も18.6%から23.0%へ4.3ポイント増加している。

この診断群分類12015においては、医療資源の投入量の減少が試行対象病院よりも試行対象外病院に大きく見られているが、試行対象外病院における軽快の減少、不変の増加など診療内容の変化が大きく、その関連について調査が必要である。